池窪弘務作品集２一九九四年（四十八歳）

一人で跳べる（ラジオドラマ）

1994-01-08（FMシアター）

登場人物

葉山一郎（４７）　薬品会社社員（営業）
山崎　正（４７）　会社社長
鈴木道子（２５）　看護婦
葉山裕子（４５）　一郎の妻
岡　洋介（５０）　薬品会社社員（倉庫係）
バー「愛」のママ（３５）

バー「愛」の客　Ａ、Ｂ、Ｃ

（テレビゲーム（テトリス）の音。間があって、少し遠くで電話のベル）

葉山「今頃誰かなあ」
妻「お願い出て、今、私大変なんだから。さ　あ、あとブロック一列」

（テレビゲームの音が遠のき、電話のベルが大きくなる。受話器を取る）

葉山「葉山です」
前田「俺だよ、前田。ご無沙汰だね。どうしている？」
葉山「ああ、どうにか生きているよ」
前田「一度会いたいね。五年前のＯＢ戦以来会っていない」
葉山「そうだね……」
前田「（間）どうしようかと、随分迷ったんだが……」
葉山「……」
前田「実は山崎の事なんだ」
葉山「山崎？」

前田「やはり知らなかったか。何故かそんな気がしたんだ。俺にはあまりいい思い出はないけれど、葉山、お前は、仲がよかったろう」
葉山「うん、だが、卒業以来殆ど会っていない」
前田「そうか、学生時代はいつも一緒にいたのになあ」
葉山「そんなもんさ。それで、山崎がどうした？」
前田「言い出したら、口に蓋出来ないもんなあ。あいつ、入院している。それも、かなり悪いらしい」
葉山「山崎が……」
前田「あんたに連絡したことは誰にも言わない。知らずにいた方が、お互いに幸せだという事もあるし」
葉山「いや、気にすることはないよ。それで、病院は？」
前田「青山大付属病院、第二内科だ。病室は聞いてない。俺も偶然知ったんだ」
葉山「俺、毎日、あの病院の前を通っているよ」
前田「そう言えば、あんたの会社のすぐそばだったなあ」
葉山「行ってみるよ」
前田「知らせておいて変だが、止めたほうがいいかもしれん。俺達、五十にまだ間があるだろう」
葉山「成人病で、十分死ねる年だよ」
前田「俺も近頃、自分が年寄りなのか若いのか、分からなくなる。日曜日の、夜遅くに悪かった。自分が行きもしないのに、おせっかいだった」
葉山「そんなことはない。有り難う」
前田「そのうち飲みに行こう」
葉山「ああ」
前田「そうか、この前も同じ事を言ってたっけ。じゃあ」

（暫くこちらの様子を伺うような沈黙の後、相手の電話は切れる。そして、少し間があり、葉山が受話器を置く音。居間のテレビゲームの音が少しずつ大きくなる）

妻「誰から？」
葉山「前田」

妻「珍しいわね」
葉山「山崎が入院しているって」
妻「山崎さんって、あの山崎さん？」
葉山「そう、俺達の出世頭、若きベンチャービジネスの旗手」
妻「しばらく、テレビで見かけないと思ったら」
葉山「あっ、そこのブロック崩れないよ」

（ゲームオーバーの音）

葉山「あーあ、もう少しだったのに」
妻「それで、病気は何？」
葉山「聞いていない。かなり悪いらしい。でも、電話は嫌だよ。なんの前触れもなしに、突然別の世界が飛び込んで来る」
妻「仕方ないわ、見えない所で、いつもほかの世界が同時進行しているんだから」
葉山「ほかの世界でも、子供が寝静まった後、かみさんがテレビゲームをして、旦那がビール飲みながら、それをポケッーと見ているのかなあ」
妻「つまらない？」
葉山「いいや、俺は見ているのが好きだから」
妻「不思議ね」
葉山「何が？」
妻「偶然といってもいいか。今日、私、面白い詩を読んだの。聞きたい？」
葉山「いいや、別に」
妻「自分の葬式を半分すませたようなものさ
　青春の友が一人
　また一人土にかえって行くのは」
葉山「まだ、死んじゃいないよ」
妻「田村隆一の主語という詩なの」
妻「（間）そんな歳になったのね。でも、結局は、自分に起こったことしか、分からないのよ」

（蚊の飛ぶ音。蚊を両手でぴしゃりと　叩く）

妻「とれた？」
葉山「ああ」

妻「一瞬の死ね」
葉山「掌を擦りあわせれば、たちまち消えてしまう。蚊に生きているという自覚あるのかなあ？　自分に起こった事も分からないまま、俺の掌の中で消えてしまった」
妻「はかないものね」
葉山「俺達もおなじ様なもんかもしれない。（間）山崎か……。突然俺の生活に現れるなんて……。二十五年も会わずに友達といえるかどうか。今更会っても、何も話す事がないかもしれない」
妻「私には、三十年も会わない友達がいるわ。これからも多分話し合うこともないと思う。会うすべもないし、生きているのか死んでいるのかも分からない。でも、心の中で問いかけると、いつも昔と同じまんまで応えてくれるの」

（北川薬品営業部。終業時の職場のざわめき）

女子社員「お先に失礼します」
葉山「ああ、お疲れさん。あ、岡さん」
岡「やあ、今日は済まなかった。倉庫の配送ミスを背負わせたりして。それに、先方に謝りに行ってくれたんだって」
葉山「気にすることないよ。営業の仕事だから」
岡「今晩はおごるよ」
葉山「今夜、見舞いに行かなきゃならないんだ」
岡「誰の？」
葉山「大学の友達」
岡「病院は？」
葉山「青山大付属病院」
岡「あそこなら、通り道だ。一緒に帰ろう」
岡「（立ち去りながら）愛のママの処もパス？」
葉山「（声を少し大きくして）早く終われば、あとから行くよ」

（自動車の音。歩道を歩く音）

葉山「ビルの谷間に、釣瓶落しに、まさしくオレンジ色のでっかい夕日が落ちて行く」

岡「ほんとにでっかい太陽だなあ」
葉山「岡さんの顔みたいだ」
岡「うん、輝いている」
葉山「でも、後は沈むだけ」
岡「そうですよ、どっちみち俺はでっかい顔の夕日だよ。でもなあ、あのばかでかい太陽が見れるのは、帰る時間と日没が一致する短い間だけだよ」
葉山「殆ど空なんか見ないもんね」
岡「奥さん元気」
葉山「うん、相変わらず訳の分からないことを言っているよ」
岡「少し変わってるぐらいの方が飽きなくていいよ。うちのなんか全然ダメ。野菜が高いの、玉子が安いのそんなのばっかり。この前、お宅に寄せてもらった時、冷酒にもみじの一葉がさりげなく浮かべてあった。風流だよなあ」

二人、肩を並べて黙って歩く。

岡「おい」
葉山「ああ、びっくりした。急に大きな声を出すなよ。一体どうしたの？」
岡「（間）吐く息が今年初めて白くなった」

しばらくして、立ち止まる。

岡「ここだよ、まるでホテルだ」
葉山「十八階だって。知らない人は、病院だなんて思いもしないだろう」
岡「長いスロープの向こうが正面玄関」
葉山「このまま、通り過ぎようか。明日も分からない友達に、わざわざ古い時間を、見舞いがてら下げて行く事なんかないんだ。薄情だと思う？」
岡「いいや、あんたの問題だから、どうこう言えないけど……。俺は単純に病気の友達を見舞えばいいと思うけど」
葉山「岡さん、本当は、怖いんだ」
岡「怖い……」
葉山「あいつ死ぬかもしれない。どんな顔をして会いに行ったらいいのか、何を話したらいいのか、分

からない……」
岡「……」
葉山「それに、あいつ、本当に俺に会いたいだろうか？現在の姿をを見られるのが嫌だって思わないだろうか？」
岡「……。いつもの処で待っているよ」
葉山「岡さん……。振り返りもせずに行っちまった。仕方ない、俺の事なんだから。（ふっと吐息を）今年初めて、息が白くなったか」

（短い間。葉山の足音だけが続く。そして、止まる。自動ドアが開く。再び、葉山の足音。遠くの方で聞こえていた救急車の音が次第に近づいてきて、ふっと、止む。足音が止まる。

葉山「ええっと、第二内科はＡ病棟か」

（葉山歩き出す、しばらくあって）

葉山「（通りかかった看護婦に）あっ、看護婦さんちょっと済みません」
看護婦（鈴木道子）「（オフから近づく）はい」
葉山「Ａ病棟に行きたいんですが」
道子「わたしも戻りますから一緒にどうぞ」
葉山「あんまり広いのでキョロキョロしているうちに、迷ってしまって」
道子「外来の診察が終わると照明を落としますから」
葉山「それに、方向音痴なもので」
道子「わたしも時々迷うんですよ。（笑い）」
葉山「ホテルのような広いロビー、病院っていうイメージがわかない。それに、静かですね。医師を呼ぶ、放送なんかもない」
道子「みんなポケットベルを持っていますからそれで呼び出します。病院自体がシステムなんですって」
葉山「屋上には、ヘリポートがあるって？」
道子「ええ」
葉山「すごいなあ、最先端医療だ」

（エレベータの扉の開く音。乗り込む　二人）

道子「階は？」
葉山「十八階」
道子「同じですわ」
葉山「山崎という患者、御存じですか？」
道子「はい」
葉山「……。（間）会えますか？」
道子「はい」
葉山「面会出来ないんじゃないかと、心配していたんで……」
道子「一番奥のお部屋です」
葉山「個室ですか？」
道子「ええ、特別室です」
葉山「特別室……」
（間）
葉山「長いですね。ゆっくりと、十八階まで、ノンストップ」

（エレベーターの止まる音、ドアーの開く音）

道子「この廊下の一番奥ですから」
葉山「ありがとう」

（葉山の足音が止まる。数秒の間。そして、ドアーをノックする音）

山崎「（病室の中から）はい」

（ドアーを開ける音）

葉山「山崎……。俺だよ」
山崎「葉山か、信じられない（長い間）」
山崎「本当に葉山だ」
葉山「久しぶりだ」
山崎「お前が来てくれるなんて思いもしなかった」
葉山「迷惑だった？」
山崎「とんでもない。嬉しいよ、夢みたいだ。涙が出そうだよ」

葉山「……。変わったろう。頭が真っ白になった」
山崎「いいや、何にも変わっていない。昔のままだよ」
葉山「俺の会社この近く、病院は会社からの帰り道なんだ」
山崎「そうか、知らなかった」
葉山「前田から聞いたんだ」
山崎「前田？」
葉山「剣道部の主将だった奴だ。俺が副将をやっていた」
山崎「剣道部の主将……？。思い出せない。そういえば、同じ名前の医者がいるよ。息子かなあ。年が合わないか。看護婦にもいたような気がする。まあ、千人を越える患者と、ほぼ同数の職員がいるのだから、俺とお前を結びつける人間がいても不思議ではないか」
葉山「それに、君は有名人だ」
山崎「有名人か。そんな時もあった」
葉山「いい部屋じゃないか」
山崎「いい部屋、でも、ここは病室だよ」
葉山「俺、応接セットのある病室なんて初めてだよ」
山崎「ホームバーがあればもっといい。コーヒーでも入れよう」
葉山「まさか、病人にそんなことをさせちゃ悪いよ」
山崎「そこの冷蔵庫に缶コーヒーがある。取ってくれないか」
葉山「いいよ、かまわないでくれ」
山崎「遠慮するなよ。俺も飲みたいんだ」
葉山「よそんちの冷蔵庫を開けるのがいやなんだ」
山崎「（笑い）変わらないな、俺の下宿に来て、そんなことを言ったことがあった。じゃ、俺が取ろう」
葉山「いいや、俺が取るよ」

（葉山、冷蔵庫に近づき開ける）

葉山「２種類ある。どっちだ」
山崎「どちらでもいい」

（冷蔵庫を閉める）

山崎「ありがとう。まあ、座れよ、座って話そう」
葉山「元気そうじゃないか」
山崎「元気そうか。俺はもう、この部屋以外の世界を失っているんだよ。だれも面と向かって言わないけど、癌だと思う。別に特別な病気じゃないんだ。石を投げればあたるほど平凡な病気さ。運が良けりゃ生き延びられるし、悪けりゃ死ぬ。幸運にも、俺は鎮痛剤が良く効いている。だから、あまり辛くないんだ」
葉山「良かったよ。俺は何本ものチューブにつながれているのかと思った」
山崎「それを見てざまーみろって、笑うつもりだったのか」
葉山「そうだよ、だけど、まだまだ憎まれっ子、世にはばかりそうだ」
山崎「卒業して一度も会わなかった。何故だろう」
葉山「あ、何故だろうね」
山崎「だが、今日、会えてよかった。思い出に浸る為じゃなく、これから生きて行くためにも」
葉山「不思議だなあ、お前の顔を見た瞬間、何も知らないのに、お前の二十五年の人生が、俺の人生の中に含まれているような気がふっとした」
山崎「同じように生きてきたんだよ、きっと。こうして話していると、二十五年の空白が溶けて行くような気がする。色んな出来事があったけど、結局俺達の間は何も変わっていない。思い出したよ。うん、前田って剣道部のキャプテンだ」
葉山「そう、二年生の時、お前は一人で正門を封鎖した。その時、真剣片手に飛んで行った男だよ」
山崎「斬られるかと思った」
葉山「まるで時代劇だよなあ。あいつ、高倉健にいかれていた」
山崎「止めてくれたのがお前。だが、なぜあの場に突然現れたんだ」
葉山「だってさ、これから、過激派を斬りに行くって、わざわざ言いに来るんだもん。止めなきゃ悪いよ（笑い）」

山崎「その彼が知らせてくれたか……。妙な巡り合わせだね」
葉山「うん」
山崎「あの時、俺は大学中逃げ回ったよ」
葉山「あれが出会いだった」
山崎「あんなことでもなけりゃ、学部も違ったし、マンモス大学の中で出会うこともなかったよなあ」
葉山「それから、学食で隣の席に座るようになり……」
山崎「不思議と気が会うようになった。お前は、友達に囲まれていたけれど、俺はそうじゃなかった。まあ、友達がいれば、一人で正門を封鎖する事もなかっただろうけど」
葉山「俺は感心したよ。俺には、絶対出来ない事をする奴だって」
山崎「四年生の時、不正入試の発覚がきっかけで、学生が立ち上がった」
葉山「そして、お前はその先頭に立った。俺はお前たちが、熱くなるほど、逆に冷めていった。我々という言葉が嫌いだった」
山崎「あの時お前はやめろと言った。そんな事をしても何も変わらないと。遠巻きで見ているノンポリの学生の中から、お前は、たった一人でやって来てそう言った」
葉山「不正入試を糺すこと、それが目的だった筈だ。お前のやっているのは政治運動だと、確かそう言った」
山崎「あの頃、俺はいずれ、軍隊が出て来ると信じていた。権力がその素顔を現すのを待っていた。今も、眠れない夜、窓の下の明かりが次々に落ち、深い暗黒の海になる頃、ビルを押し倒して、あの時、とうとうやって来なかった戦車がやって来る。だが、今はそれは権力ではない。俺の運命みたいなものだよ。葉山、窓の外には色々のものが現れるんだ。太陽だって、きっちりと、ビルの向こうに沈むんだ」
葉山「お前は、戦車を待っていたのか？」
山崎「ああ、何かとてつもないものがやって来ると思っていた。俺はそれに潰されて死ぬ。その後、市民が立ち上がる。だが、やってきたのは警官だった。市民だった。何故俺達は、警官と戦わなくてはなら

なかったか。市民と戦わなくてはならなかったか、今でも分からない」
葉山「あの時、自衛隊が出て来ていたら、多くの死者が出ていた」
山崎「慈悲だというのか？」
葉山「そう思ってもいいのじゃないか。俺達の戦いは、選択することが出来た。それが、俺達の親の世代と決定的に違っているところだよ」
山崎「そうかもしれない。仲間達は、全て、俺の指示に従ったと言った。そして、髪を切り、きれいなワイシャツを着て、ネクタイをしっかりと結んだ。今は、こぎれいな家族に囲まれて、あの時が俺達の青春だったと言う」
葉山「俺も、その中の一人だよ」
山崎「いや、お前は違う。塔に上がって来た時、取り囲まれ、裏切り者と罵倒されても平然としていた」
葉山「いや、足ががくがくしていたんだよ。ただあの時、俺がなすべき事は、一つしかなかった。お前に会うこと。今日と同じだよ。ただ……」
山崎「ただ……」
葉山「今日は迷った」
山崎「迷った……。死に直面している、俺を見るのが怖かった。辛かった」
葉山「そんなんじゃないよ。俺は、お前が元気そうなので、ほっとしているんだ」
山崎「いいんだよ、葉山、今、お前は俺の前にいるんだから」
山崎「話題を変えよう。難しい話は止めて、一つ楽しい話が聞きたい」
葉山「楽しい話か、悲しい話か分からないけど」
山崎「それでいいよ」
葉山「お前達の最後の砦か落ちた日、水浸しになった教室で、泣き叫んでいる女学生を見た。あんなに泣けるのが不思議なくらい大声をあげて泣いていた。暫くして、俺の気配に気付いて彼女は振り向いた。俺は、にこっと笑って何気なく言ったんだ。いまなすべき事は、大声で、天皇陛下万歳って叫ぶ事だよって。女学生は真っ白い歯を出して笑った。そうして、太宰治ねって言ったんだ。俺は何のことか分か

らず、それでも頷いていた」
妻（インサート）「太宰治はこう書いている
わ。日本に於いて今さら昨日の軍閥官僚を罵倒してみたつて、それはもう自由思想ではない。それこそ眞空管の中の鳩である。眞の勇氣ある自由思想家なら、いまこそ何を措いても叫ばなければならぬ事がある。
天皇陛下萬歳！
この叫びだ。
　昨日までは古かった。古いどころか詐欺だった。しかし、今日に於いては最も新しい自由思想だ。たしかに、彼の言うように戦争は、何もかも変えてしまったと思う。でも、私たちの戦争は、何も変えなかった。私たちは、一体、何のため戦ったの？」
山崎「何のために……」
葉山「彼女は、又、半べそをかきながら、両手をあげて、天皇陛下万歳」
山崎「その娘とそれからどうなった？」
葉山「以来、ずっと付き合っている。家に帰ったら、今でも居るよ。昨日も、俺に、主語という詩を読んでくれたよ」
山崎「主語、どんな詩だ」
葉山「（言葉に詰まる）いや、聞いた途端に忘れたよ」
山崎「ところで、子供は」
葉山「女ばっかり三人」
山崎「凄いじゃないか」
葉山「凄いか？」
山崎「自分の子供ってどんな感じだ？」
葉山「俺と同じ遺伝子を持っている人間がいる。不思議な気がするよ。分身のように思うこともある。しかし、やはり、俺じゃない」
山崎「会社は、北川薬品だったけ。変わらずだよな」
葉山「ほかに行く所がないんだ。出世コースからも遠く離れちまった。管理職にもなれずにうろうろしているよ」
山崎「出世なんてしない方がいい。命を縮めているようなもんだ。お前は幸せなんだよ。それに気付いていないだけなんだ」

葉山「二十五年も会わず、勝手に、他人の人生を断定するなよ。お前のことも聞かせてくれないか」
山崎「結婚はしなかった」

（ノックの音）

山崎「はい」

（ドアーを開け道子が入って来る）

道子「失礼します。山崎さん。検温の時間です」
葉山「あっ」
山崎「何だ、知っているのか？」
葉山「病院で、迷子になってたんだ。それで、看護婦さんが水先案内人に」
道子「（山崎に向かって）痛みますか？」
山崎「いいや、大丈夫。友達が尋ねてくれたんでね。痛みも忘れてしまう」
道子「それじゃ、お話の邪魔をしないうちに」
山崎「いや、邪魔だなんて」

（道子が遠ざかり、ドアが静かに閉まる）

山崎「彼女をエレベータの中で独り占めしたのか？」
葉山「独り占め？」
山崎「どうした、なぜ外ばかり見ている。彼女はもう、出て行ったよ」
葉山「夜景があまりに素晴らしいんでね」
山崎「美しいだろう」
葉山「ああ、まるで闇と光のダンスだ」
山崎「一度、バシッと、数分光が消えたことがあった。窓の下は闇だったよ、底知れぬ闇だったよ。光があれば、必ず闇がある」
葉山「あの光の下に何人の人間が生きているのだろう。想像もつかない。人の数だけ人生があるんだよなあ」
山崎「俺とは、もう無縁な世界だよ。何のかかわりもない人間が生きていて」

葉山「そうかなあ、俺は何処かで繋がっているような気がする。うまく言えないけど、多分」
山崎「そうか、そうなんだ」
葉山「（笑い）自分で何を納得しているんだ」
山崎「無縁じゃないようなあ。あの光の海から、お前が上がって来てくれたんだから」
葉山「あそこにいるんだよ、俺。……」
山崎「だが、人は誰の人生とも替われないし、誰も自分の人生と替わってくれない。本当に、運命とは残酷なもんだよ。自分に起こって、初めて分かる。それまでは、何もかもが、所詮ひとごとなんだ」
葉山「泣き言をいうなよ」
山崎「（吹き出す）お前って、いつもそうだったよなあ。哀れに思わないのか」
葉山「思わないね。素晴らしい部屋と、素晴らしい夜景、替わってやりたいよ。それに、お前は悲観しているけれど、病気は治るよ。あの時は、あんなことを言ってたなって、笑い話になるよ。何しろ最先端医療を受けているのだから」
山崎「……少しだけ窓を開けて、風を入れてくれないか」

（窓が少し開く。風の音）

山崎「そこの出窓に、つい三日前までカトレアがあったんだ。今まで、花の名前も知らないし、興味もなかった。花をじっくり眺めたことなんてなかった。ところが、鉢植えは、病気が根付くと言って、病室には相応しくないらしい。それで、会社の女の子が持って行ってしまったんだ。窓が寂しくなった。
（気を取り直したように）彼女をどう思う？」
葉山「彼女？」
山崎「今、僕達に共通の女性は一人だけだろうが」
葉山「（吹き出す）僕達……、ああ、あの看護婦さんが好きなのか？」
山崎「（照れたように）ああ」
葉山「どこに惚れた？」
山崎「恋に理由なんか必要ないだろう。俺の髪の先端から、足の指の先まで、俺の全身で彼女を愛している。鈴木道子、平凡だけどいい名前だろう。彼女

に体を拭いてもらう時、俺は、勃起してしまった。恥ずかしくって、今までの人生の中で一番恥ずかしかった」
葉山「いいじゃないか、それだけ元気だという事だ」
山崎「十年以上も前だけど、誰にあげるというでもなしに、パリで小さなダイヤがついたピアスを買った。今になると、彼女のために買ったような気がする」
葉山「まだお前の人生に現れていない彼女の為にか」
山崎「そう」
葉山「ピアスって、耳に穴を開ける？　痛いだろうが」
山崎「僅かな痛みを与えたい。愛には、いつも他人に対する痛みが少しあるもんなんだ」

（面会時間の終了を告げる放送）

葉山「それじゃ、失礼するよ」
山崎「明日も寄ってくれよ。帰り道だって　言ったじゃないか」
葉山「うん、出来るだけそうするよ」
山崎「頼むよ」
葉山「……」
山崎「淋しいんだ。女々しいと思うかい。来てくれるなら、そう思われてもいい。」
葉山「……」
山崎「もう少しを話したい。何を言いたかったのだろう。ああ、焦ると言葉が逃げて行く。うん、そうだ……、人間って、目的を持って生きているよなあ。そして、目的が達成されたら幸せだと思うだろ。だけど、本当の幸せってそんなもんじゃないような気がする。もっと些細なものなんだ。ドアのノック、その向こうに彼女がいるかもしれない。明日お前に会えるかもしれない。明日の空には、俺の好きな形の雲が浮かんでいるかも知れない」
葉山「安上がりだなあ」
山崎「そうさ、安上がりさ。すなわち、小さな希望というか、微かな渇きなんだ。それがなければ、何

も輝かない。（窓の外に眼をやる）雨が降って来たようだなあ。光がにじみ始めた。お前、傘持っているか？」
葉山「大丈夫、たいした降りじゃないし、それ程空の下を歩かない。じゃあ」

（病室のドアの開閉）

（ドアの開閉）

ママ「いらっしゃい」
葉山「やあ」
ママ「葉山さん、濡れたんじゃない？」
葉山「霧雨だから、じっとりしているくらいだ」
ママ「上着脱ぎなさい」
葉山「うん、みんなは？」
ママ「雨が降ると電車が混むからって、早々にお帰り」
葉山「薄情なもんだね」
ママ「ビールでいいの？」
葉山「ああ」

（ビールの栓を抜いてグラスに注ぐ）

葉山「（一口飲んで）今日もママきれいだね」
ママ「おせじはいいの。みんな、居酒屋ってよんでるの知ってるんだから」
葉山「それは、料理に心がこもっていて、ママがきれいで、その上安いって事」
ママ「音楽かける？」
葉山「いらない。まだ宵の口なのに、みんな帰っちまったのか」
ママ「いいじゃない、雨の日に二人きりなんて。ああ、一人で飲んでたら、酔っちゃった。そっちへまわろかなあ」
葉山「ああ、どうぞ」
　ママ、カウンターの中から出て、葉山の　横に腰を下ろす。
ママ「アリラン歌っていい？」
葉山「いいよ」

ママ「アリラン　アリラン　アラリョ
　アリラン　コゲロ　ノモカンダ
葉山「ママが故国（くに）の歌うたうなんて、珍しいねえ」
ママ「言葉も知らない故国（くに）」
葉山「御免、止めちゃった。歌ってよ、最初から」
ママ「どうかしたの今日？」
葉山「どうもしないよ。岡さんがなんか言ってたの？」
ママ「座るなり、嫁に行った娘が今日来てるの忘れてたって、飛んで帰っちゃった」
葉山「ママの方も、洋子ちゃん、今日中学の修学旅行から帰って来るんだろう」
ママ「明日」
葉山「あ、そうか。九州の土産話が楽しみだね」
ママ「それよりも、みんなと仲よくしているかが心配」
葉山「大丈夫だよ、洋子ちゃん」
ママ「そうね、私の子どもの頃とは違うんだから。アリランもあの子は知らないし」
葉山「知らないか。ちょと淋しいね。（間）ママ、幸せっていうのは、それ程たいしたことじゃないかもしれない」
ママ「例えば？」
葉山「子供のことを心配するとか、こうして、ママと話すのが好きだとか」
ママ「とりとめもなく、雨の音を聞いているのが好きだとか」

（会話が一瞬とだえ、雨の音）

ママ「本降りになって来たみたい」
葉山「この煮付けうまいよ」
ママ「九州も雨かしら」
葉山「明日は晴れるよ」
ママ「雨の音を聞いていると、昔のことを思い出さない」
葉山「……」
ママ「中学生の頃、雨は足跡という詩を書いたの。勉強はまるっきりだったけど、その詩だけは、先生

がほめてくれて」
葉山「どんな詩？」
ママ「水たまりに、雨が落ちて、小さな波紋をいくつもつくっているの。それが、幼い頃の足跡のように見えて、
雨は足跡
幼い頃の、母を追う私の足跡。
耳を澄ますと
幼い私の足音が聞こえてくる」
葉山「ママって、どんな子だった？」
ママ「朝鮮人の子」
葉山「そんな意味じゃ……」
ママ「母さんの朝鮮服の影に隠れるようにして歩いたの。誰かに見られるのが怖かった。あの時、私の頭は、母さんの腰までしかなかった……。さらっとした服の感触がとっても好きだったのに、（涙声になる）母さんの匂いがとっても好きだったのに。うっっ、うっっ、かあちゃん……」

（ビールをつぐ音）

葉山「……。ママが泣きやむまで、雨の音を肴に一人で飲んでいるよ」
ママ「有り難う葉山さん。大丈夫。私この頃、泣き上戸なっちゃった」
葉山「ママ、歌ってよ、故国（くに）の歌。最後まできっちりと」
ママ「葉山さん、今日なにかあったんでしょ」
葉山「……。別に何もないよ」
ママ「最後まで覚えているかしら……」
アリラン　アリラン　アラリヨ
アリラン　コゲロ　ノモカンダ
ナルル　ポリゴカシヌン　ニムン
シムニド　モツカソ　パルピョン　ナンダ
アリラン峠を　越えて行く
私を捨てて行く君は
十里も行かずに足痛む」
（アリランが少しずつ小さくなり、雨の音に混

じり消えて行く）

（居間の戸を開ける音）

葉山「只今」

妻「お帰り、ねえ、聞いていい？」

葉山「ああ、難しい質問でないなら」

妻「テトリスをしながら、あなたを待つ、文学界を読みながら、あなたを待つ、教育テレビを見ながら、あなたを待つ。どれが一番楽しいと思う？」

葉山「分からない」

妻「みんな楽しい。あなたを待つ以外は」

葉山「いやみ？」

妻「レトリックよ」

葉山「山崎、思ったより元気だった」

妻「遅いから、行かなかったと思った。ごめんなさい」

葉山「（取りなすように）若ノ花、勝った？」

妻「うん、勝った。曙も勝った」

（ブリッジ音楽）

（ドアのノック）

山崎「（弾んだ声で）どうぞ」

（ドアが開く）

山崎「来てくれた」

葉山「食事中か」

山崎「いや、今、終わった。やっぱり来てくれた。待ってたんだ。悪いけど、これを窓際に置いてくれないか」

葉山「これを？」

山崎「残した飯を置いてやる。明日の朝、鳥が来るんだ」

葉山「鳩や雀かなあ」

山崎「時々は、掌から逃げ出した文鳥まで来る。十八階はきついだろうに。それに、真夜中に、鳥が飛ぶ。白い大きな鳥だよ。あ、そこでいいよ。今日は、

野菜も少し添えてあるよ」
葉山「（間）つるべ落としだね」
山崎「ああ、見る見るうちに日が落ちていく。葉山、お前の家はどの方向になるんだ」
葉山「今、日が落ちていくあたりだと思う」
山崎「あのあたりか……」
葉山「少し窓を開けようか」
山崎「それ以上は開かないよ。システムなんだ。誰も飛び降りる事が出来ない」
葉山「……。風が冷たい。冬が来るぞ」
山崎「葉山、お前は死ぬのが怖いか」
葉山「……。誰だって、怖いだろう」
山崎「死ぬのは、確かに怖い。だけど、葉山、時々、わくわくするんだ。嘘じゃない。本当にそうなんだ。自分が知らない所へ跳ぶ。そこには何もないかもしれないけど、とにかく違う世界に跳ぶんだ。その時は、どうして、いつも人は、死に顔を背けるのだと思うよ」
葉山「死ぬもんか。俺より長生きするよ。只今恋愛中じゃないか」
山崎「どうして、生きていることだけをよしとするんだ。葉山、誰でも例外なしに死ぬんだよ。それは自分の運命が誰も知らない世界に跳ぶんことだと思う。わくわくすることだと思う」
葉山「……」
山崎「恋愛も、跳ぶんだよ。今まで俺は、相手の心の闇を知るのが怖くて、何時も相手の心の前で立ち止まっていた。そして、自分が満たされることだけを考えていた。恋愛なんて、何も特別な事じゃない。平凡な事なんだ。四十年以上生きて来て、初めて分かった。理屈じゃない、跳ぶんだって」
葉山「どうして、彼女に打ち明けない」
山崎「何も言えなくなる。本当の愛とは、心で何万回繰り返しても、現実の一言が言えないものなんだ。苦しいものさ、切ないものさ。こんな人生があるとは知らなかった。朝の挨拶、山崎さん、よく眠れましたか？　山崎さん、よく食べて、体力つけて下さい。よかった、山崎さん、血圧は正常。山崎さん、おやすみなさい。……。山崎さん……。それだけでも十分幸せなんだ」

葉山「……。泣いているのか？」
山崎「胸が一杯になった。自分はなんて幸せなんだろう。俺、小さい頃から、泣かない子だった。人前で泣いたの生まれて初めてだよ」

（時間経過の音楽）

葉山「それじゃ、帰るよ」
山崎「話したくなったら、電話をかけてもいいか？
迷惑じゃないなら」
葉山「（間）いいよ、いつでも」

（ドアの開閉）

（居間）

妻「そんなに思われるなんて幸せ。美しい人なんだろうな」
葉山「美人じゃないよ。不美人といってもいいかもしれない」
妻「美人よ、あなたが何と言おうとも。あなたの審美眼を知っている私が、聞いてしまったのが間違いだった。それに百歩譲っても、恋は美人が独占するものではない」
（間）
葉山「俺と結婚したの間違いだと思う」
妻「どうしたの？」
葉山「いいや、別に」
妻「私、そんなこと考えないの」
葉山「何故？」
妻「考えたって仕方ないじゃないの。結婚したんだから」
葉山「もう、十二時前か。明日も忙しい。寝よう」

（柱時計が５時を打つ。少し間があって、電話のベル）

妻「電話が鳴ってる」
葉山「（寝ぼけた声で）あああ、今頃誰だろう？」
妻「でるわ」

葉山「（はっきりとした口調で）いや、俺がでるよ」

（玄関に向かう、受話器を取る）

葉山「葉山です」
山崎「こんな時間にすまない」
葉山「山崎か」
山崎「どうしても話したかったんだ」
葉山「かまわないよ」
山崎「お前が帰った後、彼女が初めて自分のことを語ってくれた。父親のこと、母親のこと、弟のこと。夢のような時間だった」
葉山「よかったじゃないか」
山崎「それから、ずっと起きている。窓から、外を見ているんだ」
葉山「疲れるよ、早く眠らないと」
山崎「いいや、眠れない夜は、何時もこうなんだ。日が移るのを見ている。今日は、楽しかった時間を反復している。眠ってしまうのがもったいない」
葉山「深夜、鳥は飛んだか？」
山崎「ああ、盛んに飛んでいた。白い光のように、闇の中をすっと飛んで行く。鳥だけじゃない、時々人も来る」

（音楽）

葉山「しばらくすると、夜が明けるね」
山崎「街が眠りから覚める。それは、小さな音から、始まるんだ。何の音か分からない、だが、小さな音が街を起こす。音は、街の隅々までに広がっていく。俺にも、はっきりと聞こえる。それは、病院にもやって来る。廊下の隅に生まれる音。病人の寝返りから生まれる音」

（小さな音楽）

山崎「お前の家の方向を見ている。俺はね、この光景や音をお前に伝えたい。今、俺の見ているもの、聞いているものをお前に伝えたい。そう思うとたま

らなくなって、電話をかけてしまった」
葉山「うん、見えるよ。街もお前も。聞こえるよ、小さな音も」
山崎「起こしてしまって悪かった。今日は、来てくれなくていいよ。俺ばかりがお前を独占できない」
葉山「気にすることないよ。彼女の耳に何時ピアスが輝くか、楽しみにしているよ」
山崎「多分、それはないと思う。俺が渡すこともないだろうし……。それに、彼女たちは、職場で飾りを身につけない。じゃあ」
葉山「それじゃ」
山崎「（間）そちらから切ってくれよ」
葉山「ああ、」

（受話器の置く音）

（バー「愛」）

岡「今日は友達の処へ行かないの」
葉山「今夜は飲み友達優先。それに、今日はいいって」
岡「気を使ってるんだろ」
葉山「さあどうだろう。……。岡さん、あの部屋から、ここが見えるかなあ」
岡「見えるわけないしょ。地下だよここ」
葉山「あいつ変な事言っていたから」
岡「変な事？」
葉山「薬のせいかもしれないけど、窓の外に何人もの人が見えるんだって。中には酒を酌み交わしている奴もいる。あれは、光の海からやって来るのかもしれない、お前が言っていたように、この部屋と何処かで繋がっているのかも知れないって」
岡「ふうん、俺達の影絵が映っているのかなあ」
葉山「真夜中に鳥が飛ぶとも言ってた」
岡「それは、本当だ。俺も見た事がある。真っ白な大きな鳥だ」
客Ａ「（離れたカウンターから）ママ、あの花はなんていうの？」
ママ「まあ、知らないの、花音痴ね」
客Ｂ「俺の知っているのは、桜と、チュウリップと、

菊かな」
客C「俺は朝顔も知っているぞ」
客A「やかましいよ、俺はあの花の名前をママに聞いているんだ」
ママ「本当に誰も知らないの？　葉山さんも、岡さんも知らない？」
岡、葉山「知らない」
ママ「愛する岡ちゃんにだけ教えてあげる。耳かして」
客A「ひどいよママ、聞いたのは俺だぜ」
岡「え、カトレア」
ママ「う、もう、（歌う）カトレアのように派手な人」
客A「舟木一夫か、ママも古いね。（続ける）スズランのように愛らしく」
ママ「またー忘れな草の花に似て、きよらで優しい眼をした娘」
ママ・客A「みんな、みんな、どこへ行く、町に花咲く乙女達よ」
葉山「岡さん、ちょっと失敬するよ」
岡「どうしたんだよ。今、坐ったところじゃん」
ママ「葉山さん、どうしたの、もう、帰るの」
葉山「用事を思い出したんだ。ママ、この花一本貰えないか？」
ママ「いやよ。今日買ったんだもの。それに、すぐに帰っちまうんだから」
葉山「友達が死にそうなんだ」

（エレベーターの階を告げる音。扉の開閉。葉山の足音。後ろから駆け寄る道子の足音）

道子「（背後から）山崎さんの……」
葉山「（振り向く）ええ、そうです」
道子「今朝から、容体が急変され、非常に危険な状態です」
葉山「それは、もうだめだという意味ですか」
道子「意識が戻ったときに、あなたがいらっしてる事を伝えます」
道子「（立ち去りながら）お名前は、葉山さん、葉山さんですねえ」

葉山「そうです」

（病室）

道子「山崎さん、分かりますか？」
山崎「分かるよ、分かる。そんなに顔を近づけたら、唇を奪うかもしれない」
道子「（声を潜めて）奪って下さい」
山崎「……。本気じゃないよ。冗談」
道子「葉山さんが来られてます」
山崎「葉山……」
道子「お会いになりますか？」
山崎「いいよ、ありがとうと伝えて欲しい。もう、ひとりで跳べる」

（ピアノ曲がしばらく続き。突然止まる）

（電話の受話器を取る音）

葉山「俺、」
妻「あなた……」
葉山「まだ、病院なんだ……。あいつ死んだよ」
妻「（間）そう」
葉山「彼が死んだのが分かったよ。同時に音が死んだ」
妻「音が死んだ？」
葉山「様々な音が、俺の周りを行き来していた筈なのに、一瞬、何も聞こえなくなった。俺にとって大切な音が消えた」
妻「音も死ぬのね」
葉山「まず、医者が出てきて、それを一人だけ来ていた新聞記者が追いかけ、次に機器が運び出され、次に、遠い親戚だという人が、公衆電話に走った。静まり返った部屋に彼女だけが残った」
妻「部屋に入らなかったの」
葉山「あいつ、一人で跳べるって。帰ってから話そうか？」
妻「今、話したいんでしょ。続けて」
葉山「ピアス」
妻「ピアス……」

葉山「そう、ピアス。最後に部屋から出てきた彼女の耳に、ピアスがキラリと光った」
妻「……」
葉山「それじゃ、カトレアを彼女に届けてから帰るよ。終電車には間に合うと思う」

（電話を切る）

平成五年八月二十九日　了